2025 年 6 月 4 日

沼田直樹

講演会「サグラダファミリアは巨大な楽器」レジュメ

来年 2026 年はガウディ逝去から 100 年を迎えます。
キリストの塔は完成しそうですが、栄光の門は未だ完成のメドもたっていません。
今回の講演で、ガウディはなぜこの様な教会のイメージをしたか、彼は図面や書籍は残してなく、石膏模型もその多くは、スペイン内戦で焼かれたり壊されたりしてしまいました。
しかしながら、ガウディは多くの「言葉」を残しています。それらは弟子達や建築家が明確に記録しています。

今回のこの講演ではガウディが語った「言葉」、それはこの教会を完成させるのに極めて重要な資料となります。そして同時代のワーグナー、彼からオペラの「総合芸術」の影響を受け、これまでとは全く異なる教会をイメージし、建設するのでした。

時代背景：当時は産業革命による経済発展がありました。建築や芸術に多くの資金が用意され、街の中には次々と新様式の建築が建てられ、リセウ劇場ではワーグナーのオペラが大流行していました。(欧州ではワーグナーの楽劇とバイロイト祝祭劇場は知識人の間で 1 番の関心の的となりました)

聖地イメージ：カタルーニャの聖地はモンセラート。ワーグナーのオペラ、パルジファルの舞台モンサルヴァート城のモデルにもなっている。このオペラはバイロイトでのみ公開されていましたが、最初の海外公演はバルセロナになりました。　　1913 年リセウ上演

総合芸術：ガウディはこの聖地モンセラートの岩山から建物のイメージとワーグナーのオペラ「総合芸術」の影響を受けサグラダファミリアをイメージすることになるのです。

観客に究極の芸術、オペラを表現するために、ワーグナーは自ら劇場の設計を行いました。そこには劇場を楽器とする工夫があったのです。

巨大な楽器：総合芸術としてサグラダファミリアを構想するガウディはこの教会を巨大な楽器として考えました。音と光の演出、物語性。それぞれの門のファサードは聖書の世界を表現します。キリストの声を代弁する 12 使徒の塔、(それぞれの門に 4 本) からはどの様な音が聞こえるのか。バルセロナの街に響き渡り、教会の儀式では内部に置かれた大オルガンと共にそれぞれの塔の音が教会内部にも響き渡る「巨大な楽器」を構想したのでした。